

(様式 1)

令和 6・7・8 年度「京都府学力・学習状況調査～学びのパスポート～」
学校改善プラン(1 年次)【小学校】

【学校名等】

学校名	井手町立多賀小学校							校長名	白尾 尚美
学 年	1 年	2 年	3 年	4 年	5 年	6 年	特別支援	児童数	6 8 名
学級数	1	1	1	1	1	1	2		
事業担当教員名	稲葉 さとみ								
① 中学校区で目指す子ども像	「地域とつながる力」、「変化する社会を生きぬく力」、「人権を大切にする行動力」、「たくましく豊かな人間力」これらの力を使い、未来のまちづくりを担っていく子ども								
② 目指す子ども像	強く（知） 明るく（徳） すこやかに（体）								
③ 目指す子ども像に対する現状と課題	・学年を越えた子ども同士の関わりが深く、なかよし班活動（異年齢活動）に楽しんで参加することができる。 ・学力テストは、国語・算数ともほぼ全国平均程度の得点がとれているが、個別に課題がある児童がいる。 ・各教科の授業改善に積極的に取り組んでいる。 ・主体的な家庭学習の推進のため、毎週末を「自主学習DAY」とし、自主学習に取り組ませている。 ・行事ごとに総括を行い、PDCAサイクルを確立するとともに、自校の強みや特色、児童の成長等を確認している。 ・地域とともに歩む学校づくりを進め、地域の教育力を活かした教育実践を行っている。								
④ 目指す子ども像に達するための仮説	・ICTを活用し、学習活動を充実させることで、学習意欲や表現力の向上を図れるのではないかと。（CBTの活用） ・課題の発見、解決、整理、発信を通して、情報活用能力を育成することができるのではないかと。 ・個に応じた学習指導を推進することで、児童一人一人が意欲的に授業に参加し、学びを深めることができるようになるのではないかと。								

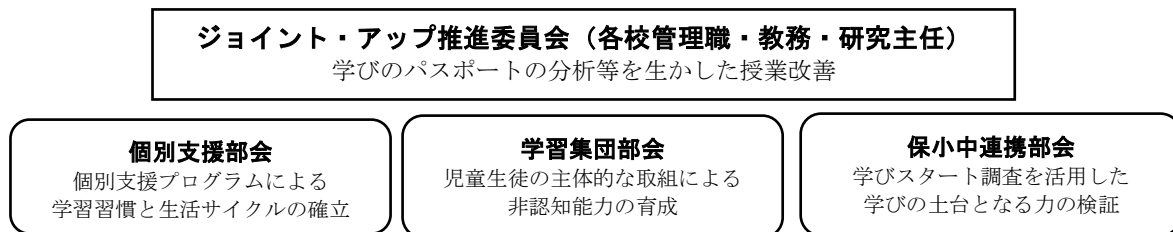
令和 6 年 5 月 1 日現在

【1 研究主題】

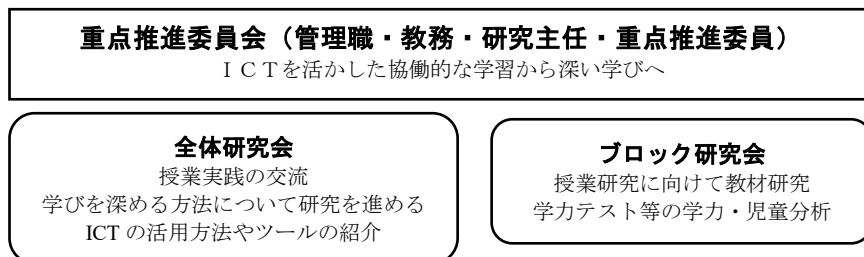
I C T を活かした協働的な学習から深い学びへ ～one step・one team・one up～
--

【2 研究組織体制】

(1) 中学校ブロックの組織体制



(2) 校内の組織体制



【3 研究計画・具体的な取組内容】

実施月	研究内容、研究方法、成果の公開 等
4月	校内研（方針）
5月	JU授業研（泉ヶ丘中）、重点ブロック研究会（中学年）
6月	3年研究授業・重点事後研究会、ミニ研修会
7月	JU夏季研集会
8月	8月上旬＊学びのパスポート結果返却、第1回分析・活用研修会
9月	重点ブロック研究会（高学年）
10月	10月上旬＊第2回分析・活用研修会 重点ブロック研究会（低学年）、2・5年研究授業・重点事後研究会
11月	JU授業研（井手小）
12月	プレゼンテーション大会
1月	重点ブロック研究会（全ブロック）、JU授業研（多賀小）＊研究校交流会（予定）
2月	プレゼンテーション発表会、校内研（まとめ）
3月	

【4 仮説及び成果を検証するための質問項目】

学年	質問番号	質問項目	概念	備考
全	31	わからない問題にであったとき、調べたり、さらに深く考えたりしている。	自己調整	
全	45	自分の考えたことよりも、相手の方がよい考えを持っていると感じたときは、相手の考えを取り入れるほうだ。	思考の柔軟性	
全	48	難しいことでもあきらめなければ乗り越えることができる。	目標に向けて取り組む姿勢	
全	72	学習するときには、教科書以外にも、辞書・図鑑・参考書・プリントなどいろいろなものを参考にしている。	精緻化	

＊5・6の分析の項目は削除しています。

【7 分析結果を踏まえた指導改善、個に応じた具体的な手立て】

個に応じた具体的な指導・支援方法 ・得点率が高いが非認知能力の低い児童がいるため、その児童に合った課題を出し、達成感を感じながら取り組ませたり、得意な部分を取り入れた課題を出したりし、自信を持たせる。 ・学力値の低い児童は、自信を失わないようにスモールステップの課題で前向きに学習に取り組めるようにする。また、教え合いなどで、積極的に他者と関わる力も付けていく。
集団としての具体的な指導・支援方法 ・小規模校の特性上、考えの幅が狭くなりやすいので、思考の柔軟性を高めるために、縦割り班での活動や授業を積極的に行っていく。 ・自己調整力を高めるために、子どもが困っていそうな様子の時にすぐに援助するのではなく、自分で考えたり、友だちと相談したりする時間を確保する。

【8 仮説の修正】

・ICTを活用し、協働的な学習活動を充実させることで、学習意欲や表現力の向上、他者と関わる力の向上を図れるのではないかと。（CBTの活用）

【9 具体的な取組内容の修正】

・他学年に伝えることを目的に、グループで学習した内容をプレゼンテーションにまとめる協働的な学習活動を取り入れる。
--

【10 児童の変容（普段の様子から）】

- ・異年齢班で清掃活動に取り組んだり、遊ぶ機会を設定したりしたことで、様々な考え方にふれることができ、他の意見を聞いて、協力することができるようになった。
- ・学力値の低い児童に、スモールステップで学習に取り組ませ、自信を積み重ねたことで、最後まで諦めず課題に取り組むことができるようになった。
- ・I C Tを効果的に活用したことで、児童がより主体的・協働的に活動できる場を創造することができた。また、プレゼンテーションが身近な表現方法の一つとなり、発見した課題に対して情報を収集し、整理してまとめ、発信することができるようになった。

【11 2年次の研究構想】

- ・児童が学習や学校生活に対して課題意識をもち、他者と積極的に交流しながら課題解決へのプロセスを考え、適切な方法で表現できるようにする。
- ・個別最適な学びの場面と他者との交流・議論の場면을意図的に取り入れ、論理的思考力とコミュニケーション力を向上させながら学力向上に繋がる授業改善に取り組む。
- ・「学びのパスポート」の結果をもとに学力の伸びや非認知能力の変容を見取り、今後の教育活動にどのように活かしていくかを検討する。